

2 長欠児童と私

財団法人長欠児童生徒援護会は、昭和三十四年十月、私が衆議院の文教委員長在任のときにつくったものである。これはどうも金がかかりそうな仕事に思えたので、力を借りるため、当時通産大臣であった池田さんに会長をたのみ、やはり当時文部政務次官だった宮沢喜一君をも引きこんで、宮沢君と私が副会長になった（その辺の事情は会の創立直後、池田さんが雑誌『文芸春秋』に寄せた随筆にあるとおりである）。

正直なところ、いろんな人から、この会をつくった心境をきかれた。きかれたというより、冷やかされたといったほうが適切かも知れない。「物ずきですなあ」、「ヒューマニズムも、ちよつと度が過ぎはしませんか」そんな調子である。それも、文教委員長時代はまだよかつたが、内閣官房長官の二度の勤めに引きつづき、その後外相を拝命するにいたって、「いったい、誰にどんな義理があつてやめられんですか」、「もつと、じぶんのからだを大事にしてくださいよ」といつてくれる人があつた。何しろ第一次池田内閣成立以来の私の役回りは、生来不敏とはいいながら、頭も体も一つきりしかないのでうらめしいくらい忙しい。それでいて今なお長欠児童生徒援護会

のことで、毎週若干の時間は割かざるを得ないのである。それも財政面の世話ことが多いので、正直なところ、相当厄介だといえないことはない。

それにもかかわらず、私はこの会をその後もつづけて世話している。もっとも、この会は会の解消を終局の目標としているような団体であり、またそれが私の願いでもあるが、少なくともそれまでは、私はこの会の世話をさせていただきたいと思っておる。

なぜか。実をいうと、そう正面きって問われると、答えは簡単なはずなのに案外、簡単ではない。いま私は、この会の世話を引き受けるようになった時の自分の気持ちを詳しくは思い出せないが、ただ一つ脳裏に刻まれているのは、教育面で何か一つ、意義のある具体的な仕事を、継続して育てたいという、一種の念願があったことである。衆議院文教委員長としての私は、委員諸氏の協力のおかげで、例えば学校安全会法の成立など、そう恥ずかしくない仕事を残し得たと思っている。けれども、委員会の仕事とは別に、というよりそれ以上に、教育とくに国民教育のテーマが私をとらえたが、そのとらえ方は、今から考えると一種の感動とでもいうべきものであったと思う。

教育は政治であり、むしろ政治以上のものでさえあることを、私は痛感した。そして、かつて躍進日本の原動力が、明治四十年代にすでに世界のレベルに追いつき追い越した国民教育であっ

たことも、改めて認識した。腰の重いといわれる私が長欠児童援護の話に、われながら案外やすやすと乗ったのは、たまたまそんな心理的なタイミングのよさがあったことは争えない。財界の先輩諸氏にも電話や手紙で、会の資金づくりをおねがひした。理事や評議員として会の運営のことまでおねがひしたのも私である。

それにしても、広い教育分野の中から、撰りにも撰つて長欠児童を取りあげたことが、私のまわりの人々の首をかしげさせるらしい。中には、私が貧しい農家の次男に生まれ、その上、少年時代に父を亡くして、学業も容易でなかったというようなことに、私と長欠児童との因縁を探る人もあろう。長欠児童という社会の最底辺の子供たちとのかかりあいが、私に、一種の解毒剤的な役割を果たすのでないかと、うがった見方をする人もあろう。たしかに、そういうことはあるのである。私は援護会の機関紙の『黄十字の友』で、次のような感想を語ったことがある。

「目まぐるしい世界情勢の中で政治の責任を負っていると、どうしても考えが、巨視的にまた遠心的になりやすい。いうまでもなく、政治は民族の運命の基本路線を敷く仕事であつて、それには東西両陣営の緊張の緩和をはじめ、世界政治の大局を見きわめなければならぬ。また国内的には、少なくとも十年、二十年後の国土や産業、国民生活の輪郭などを想定してかからなければならぬからである。何よりも現実的・具体的・求心的であるべき政治は、同時に、この上なく哲

学的・全体的・蓋然的な一面をもっていて、国際政局の渦が大きければ大きいほど、つい、われわれは政治のもつそういう一面に没頭しがちである。

そんな時、私には、長欠児童生徒援護会の会長であることが、一服の清涼剤とも、あるいは頂門の一針ともなる。奇蹟にもひとしい日本経済の躍進も、国の国際的地位の向上も、トリモチのような伸び方でなく、国民生活の底辺からの引き上げでなければならぬことはいうまでもない。そのことを援護会の仕事は、理屈でなしに、皮膚にじかに伝えてくれる。これは政治家としての私にとっては実にありがたいことで、よくぞこの会をこさえたものだと思っている。」

しかし、範囲を義務教育の児童・生徒に限定しても、不幸な子供たちは何も長欠児童だけではなない。むしろ、たとえば精神薄弱児や肢体不自由児は、長欠児童よりははるかに数も多く、気の毒さの度合いも決して劣ることはない。長欠児とその他の不幸な子供たちとの間に、ヒューマニズムの観点からにせよ、国の行政の上からにせよ、いささかの差別もあつてよいはずはないのである。私が特に長欠児童援護の世話をしているというのは、各種の児童福祉に軽重をつけての選択ではなくて、この方面の権威松永健哉君との偶然な人間的つながりと、当時まで長欠児童援護の全国組織が無かつたことが直接の理由であつた。

こうして私はこの会の主宰者になつた。精神も肉体も普通かそれ以上でありながら、長欠の状

態に放置されている子供たちのことであり、その人達がこの会の援護に浴しているということである。その数は今日まで一九、七〇〇人に及んでおる。しかも、貧困は貧困なりに、親も子も涙ぐましい努力で就学を阻む悪条件を克服しようという努力に、会の激励と指導の手が差しのべられている。正会員はすでに四、二二〇名の多きに達し、第六回までに表彰を受けた方は二、三九二名に及んでいる。東京の山谷ドヤ街にある会の分室が手がけた五十数名の子供たちの実例は、このような援護活動の普遍的な可能性を証明している。そしてこの実験は、本年中にはさらに規模をひろげ、また炭鉱地にも伸びようとしている。

これは私のおどろきであるとともに、大きな喜びでもある。はじめ私は、貧困対策を抜きにした長欠問題の解決には極めて悲観的であつた。そして、今なお国民生活の広い層に深淵をつくっている戦争の傷跡を思い、その解消にはなお相当の年月を要することを思つて、長欠児童生徒援護会の前途の多難を覚悟していた。その認識は今日も修正の必要はないと思う。しかし、この事実のもとで、会の実務者諸君が示してくれたものは、前述したように、禍を転じて福となすの教育的手段であつた。長欠問題を貧困との戦いと解した私にくらべ、この諸君は、貧困がもたらす諸悪との戦いとして受けとめて、政治の課題を見事に教育の課題に転化させてくれたのであつた。そして、たくましく育ちゆく魂にとって、物質的貧困がもたらすものは、必ずしもつね

に悪の面だけではないこと、反面のプラスの要素を強調することこそが、長欠児童援護の眼目であることを、具体的な方法論としても実証してみせてくれた。

私は、長欠対策のこのような一種の精神主義的方针には、おどろきと喜びのうちにも、やはり多少の危惧を感じる。児童福祉の他の分野とともに、長欠児童の援護には、もっともっと国の援助を惜しんではならない。けれども、物質的援助のみが唯一の手段であると主張し、現実を夢のような理想郷と対比させて、念仏のように「政治の貧困」を唱えて能事終れりとする人たちによって、いまある眼前の長欠児童はひとかけらの幸福をもつかめないのである。しかし、飢えに泣くわが子を見ては、母親は、母乳も代用ミルクもなければ、豚の乳でも狼の乳でも飲ませずにおれないだろう。今日の長欠児童を、理想郷の到来までこのまま待たせておくわけにはいかないのである。放置しておいたら、数年後にはもう手をつけれなくなり、生涯の文盲者として、民族の厄介な負担となることは、火を見るよりも明らかなのである。現在、少年院収容者の六割が、かつての長欠児童であるという統計上の数字は、空おそろしい以上の悲惨事である。それを思うならば、今日与えられた条件の中で、手のとどく限りの手を尽すことこそ、真のヒューマニズムではあるまいか。幸いにして、援護会のこのようなゆき方は、社会の多くの善意ある人々の共感を呼び、援護物資の寄贈や里親の申し出などの協力に恵まれつつあることは感謝にたえない。

そういうことで、私は自分と長欠児童という一見奇異な結びつきを改める気持ちはない。もちろん気持ちはこのとおりであるが、会の事業面にまで細かく立ち入る余裕はないので、私の役目は、会ができるだけ動きやすい条件と状況をつくる上で、多少の力をかすことにある。もちろんこの長欠児童生徒援護会は、私と教育問題とをつなぐ唯一のパイプではない。しかし、それは特異なパイプである。その意味は、私の立場上、教育問題を国の行政面や党の政策面などを通じて、判断を下しがちであるが、長欠問題は、それを逆の側からのぞかせてくれるからである。いずれを表層とし、いずれを深層とするかは、どちらでもよいが、民族の要望や歴史のエネルギーを総合的に把握することが大事なことは、教育においても変りはない。その意味で、年に一回か二回、何かの行事の機会に、一群の長欠児童そのものと、キャンプで語ったり、食事を共にしたりすることも、私にとっては一種の命の洗濯になる。

最近、この会の活動は、さらに新たな領域に進展してきている。潜在長欠者の数は最少限二〇〇万はあるという想定の下に、その詳細な実態の把握と救済手段の検討に取りかかっている。二〇〇万といえば全国小・中学校生徒の一割を超えるが、これは、現在の重大な社会問題の一つである少年非行をもふまえての、問題児防止の一大キャンペーンともいえよう。

日本の教育は今、大きな曲り角にきている。目ざすところは、国づくりに直結した人間づくり

の教育である。それには、制度上の問題もあるし、内容や方法上の問題もあるが、いちばん肝心なことは、人間をつくる人間つまり教師や指導者の問題である。ひと口でいえば、傍觀者のな虚論や固定観念や情性から脱却し、つねに現実から眞実を創造する英知と情熱が、今日ほど教師や青少年指導者に求められている時はあるまい。

そんなことから、長欠児童援護という一見片隅の運動が、国民教育と青少年育成に何らかの有益なサゼッションの一石でも投じうるなら、その意義は小さくないと思つ。